

グランド・ハーモニー

野口津義夫

純文学的ファンタジー

恐怖と戦慄が二人を襲った。だが、言い様のない心地よさの中で、怨恨や敵意や憎悪などの人間的属性を抜き取られた二人は、目前の異次元的な友人達に却って、けだるい親近感を懐き、弛緩した全身に超時間的な幸福を感じさえした。(本文抜粋)

グ
ラ
ン
ド
・
ハ
ー
モ
ニ
ー

はじめに

この小説は、1991年から1992年にかけて、地球という星の、日本という国の中心部、関東地方と呼ばれるエリアで起こった奇怪な出来事と、当時の私の日記を基にして再現した物語である。

当時はパソコンの先駆けともいべきワープロが広く普及し、早くも情報化時代を迎えていた。街角や大学や会社では多量の情報が氾濫し、人々はその恩恵を受けながらも、それに振り回されていた。そして人々の知的欲求は強く、新しい時代の中で何とか活躍していこうという方向性を模索していた時代でもあった。他方、そうした時代に遅れないで付いていこうと悩み苦しんでいた人達がいたことも事実である。

さて、この物語を単に過剰な情報と、その処理に四苦八苦する人間を描いた小説と解釈するならば、それはそれで間違いではないが、ご承知のように、私の小説が、それだけで終わるはずがない。人間の心の奥深くに潜む本源的な情動と、逆に外部からの刺激として私達に語りかけてくる理解を超えた爽やかな調べに、真実を描きたいという私の思いがこもっている。

よって、終章では単にストーリーに結末をつけるといっただけではなく、序盤から私がモザイクのように苦労して組み立ててきた真理が、爽やかな感動となって読者の心に鳴り響くように構成している。また、哲学的な要素はもちろんだが、地の文の登場人物の心理や私の人生観・世界観の描写にも目を留めていただければ幸いである。

では、SF的要素を取り入れた私の哲学的ロマン小説の最高傑作、長編純文学的ファンタジ
ーをご期待ください。

序章 憧憬の人

一一二五本という走査線の数にちなんで、十一月二十五日を「ハイビジョンの日」とし、平成三年十一月二十五日の午後一時から、放送衛星「ゆり3号b」を使って、ハイビジョンの本格的な試験放送が始まった。

ハイビジョンテレビは従来のテレビより画面が横長だから、それだけ情報量が増え、対象の動きを切れ切れに映し出さなくてもよく、高所から展望しているような臨場感を味わうことができ。また、繊細な画質、高音質、より自然な色彩などを有した鮮明な画像は画期的で、画面の再生や合成、肉眼では見えない細部の拡大も容易に可能ということで、スポーツ界や教育界だけでなく、医療界やファッション産業などの各分野への高度な応用が期待される。

ただ、ハイビジョンテレビは一台四百万円以上もするので、一般の人は手が届かないから、普及するまでは放送局やショールーム、そして郵便局や科学館などで視聴するしかない。

勤労感謝の日も過ぎて、学園祭の季節も終わった十一月末のある日、杉原道夫は有楽町阪急一階のペルソナセンターの前にいた。

「映画みたいに迫力満点ね」

「きめ細かくて見やすい綺麗な色だわ」

「従来のテレビと違って、画面の縦横比が三対五もあるんだよ」

わかった振りをして、テレビの前に群がっている物好きな人達を尻目に、杉原の目は、ただ一点に注がれていた。

その時、側でハイビジョンテレビを見ていた四十歳位の男が、彼に話しかけてきた。

「よく、こんなに綺麗に映りますね」

不意だったので、杉原は慌てて答えた。

「ええ、走査線の数違いますからね」

「へええ・・・」

走査線と言っても、男はわからないらしい。

「普通のテレビは五百二十五本しかないでしょう」

「じゃあ、このハイビジョンテレビは？」

「千二百二十五本もあるそうですよ」

「へええ、そうですか」

「だから横長なんですよ」

「なるほど。今、誰かが言っていましたね、縦横の比率が三対五だって」

「いや、その後、九対十六になったんですよ」

「何だ。でも、なぜ、そんな半端な数なのかな？」

「何でも、それ以上増やしても無駄だそうですよ」

「なるほど」

「だから近づいて見ても、今のテレビみたいに、走査線が気になるということはないようですね」
「つまり、きめが細かいということですか」

「そうです。それに横長画面だから視角が広いし、視野いっぱいに見られます」
「情報量が増えるということですか」

「それもありますが、要するに、普通のテレビよりも、ずっと自然に見えるということですね」
「音も綺麗なようですが？」

興味があるのか、男は杉原にどんどん質問をしてきた。

「そうですね。普通のテレビはFM音声ですが、ハイビジョンテレビはPCM音声です」

「何ですか、そのPCM音声って？」

「そこまでは僕も知りません。失礼ですが、衛星放送は？」

「それは見えます」

「5チャンネルに、音声PCMっていうのがありますね」

「ああ、BS5チャンネルの独立音声の？」

「ええ、デジタル音楽放送の、あれと同じでしょう」

「あれは実に素晴らしい音ですね」

「つまり、CD並みの音質だということでしょう」

「ふむふむ」

彼女の長い黒髪が、師走も近い肌寒い澄んだ空気の中で、山間のせせらぎのように揺れるのを

杉原は見逃さなかった。待ち人がいるのか、時折見せる彼女の見回す仕草は初恋に似た甘いときめきを喚起して、コートの下に見え隠れする彼女の淡いピンクのセーターが彼に失われた安らぎを与えた。マリオンから出て来てもう二十分になるが、色白の顔にうつすらと紅く口紅を注したその愛らしい女は、一体いつまでそうしているつもりだろうか。

「でも高いんでしょう、これは？」

ハイビジョンテレビを指さして、男は質問を続けた。

「えっ？」

「このテレビですよ。いくらいいテレビでも、あまり高くちやあね」

ぼうつとしていた杉原は、自ら物好きなのに他人の物好きに顔をしかめそうな男の質問に、また慌てて答えた。

「そうですね。MUSEデコーダーと合わせて、四百万円はするんじゃないですか？」

「四百万！それじゃあ一般の人は買えませんね」

「ええ・・・」

「その何とかデコーダーというのは、一体何ですか」

「ミューズデコーダーですか」

「そう」

杉原は説明に困った。

「今映ってるのはBSの9チャンネルでしょう。でも、我々の持っているBS機器では映りませ

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。